明治四十一年十一月十五日發行
明治三十七年五月七日第三種郵便物認可

明治の女子

明治の女子
第五卷第十
白露號
明治四十一年十一月十五日發行

▲ちいさき夢（大塚楠緒子）▼
●メリーライオンの教育主義……丹羽清次郎
▼體育と社會的遺傳……大森兵藏
▼マシユー、アーノードの詩……秋田雨雀
●現代思潮と青年女子の覺悟……大隈伯爵
▼水の精（承前完結）……辻村靖子
▼小塔……坪田城山
●爾の信仰爾を癒せり……櫻喬生
▲納戸町寄宿舍落成式▼

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治の女子

「明治の女子」は日本基督教女子青年會中央委員が發行する機關雑誌也。
「明治の女子」は一年分郵税共金五拾錢一部郵税共金五錢とす。
日本基督教女子青年會は青年女子の衛生、社交、智識、靈性上の發達を計るための團體也。
日本基督教女子青年會中央委員左の如し。

委員長　エム、エ、ホイツトマン
副委員長　岡見惠子
記録書記　エ、ジー、ルイス
會計　フィシヤー
萬國基督教女子青年會同盟委員　河井道子
萬國學生基督教同盟會委員　宮川すみ子

東京在住委員
津田梅子　渡部瀧子
エ、ピー、ウエスト　井上友子
平野濱子　鈴木歌子
中島小春　井深花子

地方在住委員
大坂　ケー、ツリスツラム　京都　松田道子
京都　ジ、エス、フエルプス　仙臺　エル、ザフルー
名古屋　イ、エム、ソーパル　廣島　エヌ、ジー、ゲインス
日本女子基督教青年會幹事　エー、シー、マクドナルド
同副幹事　エス、シー、フキツシヤー

明治四十一年十一月十三日印刷
明治四十一年十一月十五日發行
東京市麴町區土手三番町十五番地
發行兼編輯人　エー、シー、マクドナルド
東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷人　島連太郎
東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所　三秀舎

日本基督教女子青年會の事に付き御尋れの節は東京麴町區土手三番町十五番地同會事務所宛にし御尋相成度候

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ちいさきゆめ

大塚楠緒子

秋の心は解かねども
楓に似たるたなそこに
乳さぐる兒のねむりかな。

秋風かばう袖のうち
母の涙にあらはれて
小さき胸よなにを夢みる。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

メレーライオンの敎育主義

青年會名譽主事　丹羽清次郎

凡そ二十年前のことなりき、余は「メレー ライオン」の傳を讀み、其偉大なる淑女としての性格事業及び傳道の精神に感激したり。然も其の波動は今尚余が心に存して爾來同女の名を讀み或は聞く時には一種の奬勵と鼓吹とを余に與へたりき。而して特に此感想を深からしめたる一事は余が在米の日に親しく同女の生ける記念碑たる「マウントホーリヨーク」女子大學を訪ひ、其宏大なる事業と其域內に任る女の墳墓を見たることなりとす。「ライオン」孃が非凡の天才を以て米國に於ける女子大學の先驅をなし、婦人に高等敎育を授け其成功を世に輝かし以て同性の爲に大なる恩惠を施したるは實に稱贊感謝に堪へざる所なりと雖、吾人が尙詳細に同孃の精神と事業とに就て觀察する時は、更に多大の興味を感じ、敬服の念愈切なるを感ぜずんば非らず。蓋し同孃の敎育上の主義は決して只學問を授くると云ふのみに非らずして基督敎の信念を振起し以て品性の高上を計り、所謂才德兼備の人物を養成せんとするに在りき。此主義は果して能く實行し得るやに就ては當時疑問を懷けるもの少からず。然れども「ライオン」孃自らが、能く信仰と學問とを併行せしめ、才智と德行とを兼備せる人なりしを以て其獨特の敎育主義は着々として成功し、三十五年間の敎師として十二年間大學校長として、三千餘名

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の女學生に偉大なる感化を與へ其の教育主義は今も尙校内に光明を放ち更に一般の女子敎育の上に大なる感化を及ぼしつゝあるなり。

然れども「ライオン」孃の敎育主義は決して只學問と信仰に於て自修自得を以て止むべきに非らず。健全なる信仰の種子の播かれたる所には必ず吾人の豫期以上の結果あるは寧ろ自然のことなり、學問品性の開拓を以て建設せられたる「マウントホリー、ヨーク」大學は實に外國傳道宣敎師養成所となりしは實に吾人に大なる奬勵を與ふるものと云ふべし。

玆に一言すべきは敎育上に於ける傳道心の價値なりとす。若し傳道心にして敎育上より論斷して學生の品性人格修養上無益若しくは有害なるものならしめんか、學校當局者は宜しく之を排斥すべきなり。然れども理論及び事實の上より論ずるも學生をして最も偉大にして高尙なる理想を確認せしめ且此理想より絕えず盡きざる奬勵と鼓吹とを受けしむるは傳道――然り全世界の傳道の精神の外他に勝れるものなきを信ず。故に「ライオン」の大學が外國宣敎師養成所たることは其意義の深長にして其感化の大なる、吾人が潜心以て咀嚼すべき敎訓なりとす。

抑も「ライオン」孃が、世界人類に傳道すべしとの精神は、幼時より其の心に潜みし所にして、彼の女が甞て學生に語りし中に「余が胸中に輝やきし大なる現象は「ケレイ」其他の人々の初めて異敎徒に福音を宣傳せし事業にぞある。」「ミルス」其他の人々が外國傳道を企てたることが當時に在つては驚嘆すべきことゝして基督敎家庭に於て物語りとせられたるが余は大に此問題に注意と興味とを有したり。」と、かくの如く孃は幼時よりして外國傳道に就て一種獨特の趣味を有し、外國傳道特志者會の歷史を研究することを欣び更に彼等をして此決心をなすに至れる精神を尊び、彼等の仕へまつる神を敬ひたり。甞て「フイラデルフイヤ、サレム」より最初の

外國宣敎師の出發せる時の如き孃は實に一種の鼓吹を受けたり。數年の後更に同鄕人「プリニー、フイスク」が將に出發せんとするに臨み彼が「ポール」の言を引用し我れ今聖靈に導かれて「エルサレム」に行く然かも如何なることが此身に起り來るやを知らずと言へるを聞き、胸中の琴線は忽ち響きて孃の精神も亦其宣敎師と共に「エルサレム」に至るを覺えたり、と言へり、夫れ斯の如く孃は幼時よりして傳道に深き趣味を感じたることゝて總ての傳道會社に對しては最も多大なる同情と尊敬とを捧げ、吾人信徒は傳道會社が吾人に代り吾人の最大義務を果しつゝあるを思ひ其負へることの大なることを感得すべきを强く人々に告げ且つ傳道會社をして一歩たりとも退却するが如きことなからしむべきを稱へ、若し斯の如きことあらんか吾人は直ちに吾人の最終の金圓を會社に捧げ最終のパンを頒たざるべからずと論せり。

孃の希望は大學が最も高き低度に於て傳道の精神に滿たされ其學生は全世界人類の救濟の爲めに生くべく修練されたる者たらんことなり。孃は又曰へり「若し吾人にして正當に基督の爲めに働くことを欲するならば、吾人の心中には全世界を救ふ希望なかるべからず」と、孃は活働に於て、祈禱に於て、献金に於て全世界を記念せずんば非らざりき。

孃は献金の精神を奮起せしめ献金の標準を高むるべきを主張して曰く「吾人の献金の標準は古人の夫れと異ならざるべからず　吾人の最低の献金は三十年以前の夫れの最高の高さにまで昇らざるべからず、吾人は若くある丈け夫れ丈け吾人の兩親よりも高く上らざるべからず、彼等は勉め勵むことに依り又彼等の有てる光明に依り献金せしならば冠を得ん、然も吾人は善をなす爲めに、より大なる光明と　より大なる機會とを有てり、神の攝理は基督者に對しては何處に於ても道、高き道、聖き道を開き、進んで步む足をして風の翼の如く地の隅々に至る並救の福音を宣ぶる爲めに走らしめん、……吾が親愛なる學生よ汝の總てのものを賣りて之を人に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

施せよ、然らば汝は天に於て財寶を蓄へん、ォヽ此財寶は如何なるものなるか、汝の働に依り天にまで運ばれたる贖はれし靈に非ずや。

誰又善事と知りたることは直に進んで之を斷行すべきを敢へて曰く「若し汝にして善をなすべく望まば、直ちに之をなせよ、機會を俟つ爲めに汝の有する僅かなる望も失ふに至らん、他より動かされたる感情は極めて危險なり。働なき感情は報ひなし。基督の爲めに働き、苦み、且つ己れに勝てよ、然らば終りに於て總て歡喜とならん」學生よ君等は自ら犧牲をなしたりと感ずる迄暗黑の中にある人々の爲めに献金し苦勞し、祈禱せしや。御身等は自身に他人の救ひの爲めに地の極てまで行くの決心ありや、若し吾等にして苦勞を忍ぶべく他人を送りしならば御身等亦献身を實行すべく希はずして止むべけんや。乞ひ問ふ御身等は果して慟哭以て己れの爲すべきことを知らんことを欲するや、否や。

くりすます號卷頭豫告!!

ホーソンの「マーブル、フォーン」(假りに「心の轉化」なる譯語を用ひん)を讀みて罪の喜悅を難ず…………櫻喬生

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

體育と社會的遺傳

女子大學講師　大森兵藏

私は今體育と社會的遺傳との關係に就て暫らくお話しやうとする前に、一應遺傳と境遇とに就て申し述べて置くの必要があると思ふ。

一體遺傳と境遇とは二ッの全く異れるもので、生理的に云へば吾等人類が各自に具有するものを其の儘に傳ふるのが遺傳で、外部より色々な刺激を以て其の實質を變化せしめんとするのが境遇の力である。遺傳を内的とすれば境遇は外的性質のものである。

斯う云ふと遺傳とは全然不變的性質を帶べるもの丶やうにも聞ゆるが、實は左樣ではない。我等が自然より受け得たる個人としての肉體は一代の中に恐らく變ることはあるまい。けれども我等が現在受けて居る境遇の力なるものは、實に偉大なるものである。此の境遇の力と遺傳的性格とか互に相合一して、次に生れ來るべき子孫の遺傳的性質を形成する。私が特に社會的遺傳と云ふのは、我等の祖先より來れる此の不變的力と、現在色々と浮動して居る生活の力とが相結合して次のヂエネレーションに傳はり、此に又新しい一種の遺傳性を形成する徑路をいふのである。

然して若しも遺傳なる力が絕對に不變的性質のものであるとすれば、人類の發展進歩といふものは從て亦皆無となるわけである。幸にも此に境遇の力なるものがあつて刻一刻と變化し改造を促して行く。もつと組織的に云へば、人體の組織、人知才能を改良進歩せしむるのは、一に吾人がある境遇の下に錬磨修養を積むて之を子孫に傳へ、此に善良なる新しい遺傳性を形成するが爲である。生物進化の上に就てみても同樣である。只一身一個の爲めに品性を磨き健康を進むるのは、やがて將に來らむとする子孫後世の爲に大なる貢獻と責任とを盡して居るのである。此の立脚地よりして私は少しく體育と遺傳とに就て論及してみたいと思ふ。

今一寸お斷りをして置かねばならぬことは、體育と云ひ遺傳と云ふも、決して一個人に就て語るに非ず全

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

體として、社會的團體的にみて之を論ずるのである、其れで今述べたることを總括してみると、全體遺傳とは不變的のもので、境遇は其の不變的遺傳性に向てある力を及すものである。例へば二十世紀の前半紀に於ける國民の特性は、過去十六七世紀に於ける特性を承け繼いだものである。然して又今日二十世紀の上半紀に於ける國民特性の性格は將に來らむとする二十一二世紀の先驅をなすのである。故に我々が今日進歩したる個人的體格と性情とを以て愈益々進化發展の山路をかけ上つたならば、近き二十世紀の後半期文明を形成する上に於ては、至大なる勢力となることが出來る。されば遺傳なるものは明に社會的生命と認めても過分ではあるまい。

私は境遇の力なるものが至て複雑なものであることを知つて居る――風俗習慣、氣候風土、衣服家屋等種々様々ではあるが、今日最も著しいものは全體の傾向と體育の改良とてある。

先づ第一に云ふべきことは社會的生活の變遷である。之は世の中の進歩發達に伴ふべきもので、殊に前世紀の後半よりして最も著しく現はれて來たのである。蒸氣電氣の發明に依て著しく工業界の狀態を改め、郵便制度の完美に依て地球の距離を縮める。商業取引は愈敏活になる。斯くて商工の上に、乃至は國民健康の上に如何なる影響を與ふるかは極めて重要なる問題である。之を、我國勢に就て考へて見ても明瞭である。お百姓達が朝晩勞働して手足で働いて居た時代は少しの苦勞も知らず愉快に安心して居たが、蒸氣機械の盛に應用せらるゝ今日となつては鍬を捨てゝ工場に入り、不淨な空氣を吸つて一室の中で孜々として働く。神經の受くる衝動は次第に烈しくなつてくる。健康上時間を制限する必要も起る。從て肉體を害ふことも多くなる。殊に硝子製造所などに這入つて年中硝子の管を吹いて居るものは少からず肺の官能を惡くする。又商業などやる人でも全く筋肉の勞を廢して頭腦のみを使ふ。のみならず各自に責任義務の念慮が發達進歩するに從て、人は非常なる精神的衝動をうけるのである。

例へば船中無線電信の助を借りて陸上に於ける總ての出來事を聞知して直接之を印刷に附し、一個の美麗な新聞紙として配布するのである。斯の如く人は之に依て少からぬ利便を感ずるのであるが、然し人間の體力は暫らくも安まる時はない。日本でも近來非常に商工業の上に敏活の度を加へてきた。けれども英米の其れに比較してみると、まだなか〳〵のろい。一例を云ふと電話の取次である。折角話しをして居ても大事な所にくると一寸待つて下さい……暫らく待たさして置いて甚しきものになると二度も三度も「待つて下さい」をやる。迷惑千萬な話である。世の中がモ少し平等に進歩發達してくると敏活の度も次第に高まり取次などは次第に不要となつて、皆自分自身で用を辨ずるやうになる。今に斯樣な時代が屹度起つてくるに相違ないと私は信じて居る。

尚一歩を進めてお話しをすると、近來生活の狀態が非常に變つてきて女子の上にも著しく領土を擴げてきた。現に學校の敎師であり、電話の交換手であり、工場製糸場、紡績事業に至るまで非常な速度を以て婦人女子を要求して居る。生糸絹糸の製作に就ても婦人は殊に働くべき餘地を有つて居る。此等の事業が日に〳〵盛大となつて婦人の道は愈開けて行く。一方より見ると、此等の現象は大に喜び慶すべきことではあるが、然し又他の一面――國民女子健康上――より觀れば寧ろ大なる不幸である。呪ふべき兆候である。けれども之等がもしも社會的生活上必至必須のものであるとすれば、我等は之に對して大に節制的注意を拂はなければならぬ。故に大體の意味に於て近世生活の變化、及び之に伴ふ體育的觀念の進歩は少くとも必須のものとして一般人心に認知せらるゝの時機が早晩到達するに相違ないと信ずるのである。

最後にお話すべきことは、此の健康の狀態を直接に觀る時に、總ての生物は其の組織が非常に復雜して居る。が然し其の内容深く立ち入つて見ると至極單純である。即ち一個の細胞である。之が色々に進歩發達して吾人の見るやうな健康なる組織を構成するのである。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

旨いものを喰べて適度の運動をして精神の平安を保つて居ると、其の人の肉體は美しく輝いてくる。けれども粗食して不健康なる場合には肉體も從て瘠せ衰へて艶も何も失つてくる。身體よりして勢力を得ることなどは勿論不可能のことである。吾人の細胞は限りがある。と云つても今日以後の人類に對する責任は決して看過すべきものではない。我等は現時の日本を愛すると共に將來の日本をも顧慮せなければならぬ。况や日本の人種は體育上に於て非常に不利なる地位に立つて居る。此の點に就て我々お互は大なる責任を感ずると同時に、自ら起て其の進歩改良に全力を注がなければならぬと思ふ。

前に申し述べた通り、我等一般國民の健康なるものが、前世紀よりして次第に承け繼いだ細胞組織の如何に依る者であるとすれば、私共は決して自己一身と雖も輕視するわけには行かぬ。現在の我の健康は我が後世子孫の健康である。我等が若しも今日の社會に向つて體育上大なる遺傳を殘すことが出來たならば、我等は直接に間接に社會的進歩を助成したものといふべきである。

然らば如何にして良き遺傳を作るべきか、之を細かに云へば先づ衣食住である。日常の生活狀態の革新である。食事の分量に注意し、睡眠の時間を量り、身心の平靜と安息とを依續する爲に常に規則的攝生を守ること、入浴の方法に依て身體の淸潔をはかること等は先づ其の主要なる部分である。全體の上から云つたら色々注意し說明すべき條項もあるが、今は其の隙がないから、單に體育の消極的一面をのべて此の文の終結としたいと思ふ。

要するに、今日の世は體育に就て大なる誤解の念を懷いて居る。人は運動とし云へば直ぐにテニスやボートのみと考へる。けれども運動といふ語は然かく範圍の狹いものではない。日々我等が行つて居る一種の働きが既にもう立派な運動である。此等は元より筋肉よりも寧ろ內臟のもの――例へば呼吸器、心臟の働きなど云ふ――各機關の官能が盛となつてくる。各自十分

に其の責任を盡すやうになつてくる。中には唯之だけで運動は十分だと考へて居るものもある。故に正しき姿勢を取ることは一面には外形の美を形成する意志の力を表はすものとなるのである。之に聯關して運動と知識とのことに就て少しく申しのべて置かう。

運動と知識とは全く關係のないやうに考ふるものは大なる誤りである。現今心理學の指示する所に依ると、見る時と物に觸れる時と、皆夫々腦の働く部分が一定して居る。即ち腦の外部を包める部分は運動神經の部分である。腦神經が疲るれば、見るとき見る場所の細胞を衰へさするのみならず、引て他の部分にも影響を及ぼすことは學者の等しく唱導する所である。故に運動神經を十分に發達せしむることは、やがて知識の細胞を助くる一便法である。けれども過激なる運動は却て知的細胞をも消費するものなることを考へねばならぬ。吾等の一擧手一投足、すべて神經の働が伴つて居る。之れ運動神經の發達が知識の細胞に至大の影響を及ぼす所以である。故に運動は單に無意義に遊びまわると云ふよりも筋肉を種々なる方面に働かせることが至極肝要である。

幾度も繰り返す通り、個人的知識を進め現時の境遇を改めて自體の上に一倍の改良進歩を加ふることは單に一個人としてのみならず、社會的人類の上よりみて大に喜ぶべき現象である。自己の身體を鍛ひ強固にする。之は我等の祖先に對する至當の報恩であるのみならず、次の時代を形成すべき子孫に向て——良妻賢母たる——美しき資格を與ふる所以である。

此等は決して一時の慰みではない。男女を問はず、我等日本國民が眞面目に研究すべき重大な問題であると思ふ。之は女子の一大事業で、決して男子のみの事業ではない。婦人は國家社會の母である。國家社會の健康は先づ其の母たるべき婦人女子の方に求めなければならぬ。此等は子女教育の責に任ずる人々の大に考ふべき要點であると信ずるのである。（文責在記者）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

マセュウ●アヽノードの詩

秋田雨雀

私の生國は有名な三湖の流るゝ津輕海峽に近い、淋しい小城下です。私は歸郷する度毎に此海を通る。此海を通る度毎にマセュウ●アヽノードを憶はない事は出來ない。何故なれば私は此海を見れば直ぐに彼の有名な「ドヴァの海邊」を思ひ出てるし、此詩を誦すれば此海は更らに一段の高い響を以て私の胸を打つからです。

マセュウ●アヽノード(Matheu Arnold 1822-1888)はテイムス河の谷合、ロンドンから程遠からぬ小都會レイルハムに生れた。父は有名なラグベイの校長アヽノーード博士で、此人の人格は當時多數の人の尊崇して置かない所であつた。父も祖父も英國の敎會の牧師をして居たのでマセュウ●アヽノードは其遺傳からしても幼時の感化の上から見ても深い信仰の内に人となつたのである。斯ういふ深い幼時の宗敎的な周圍から出て、當時精神上の危機を劃した懷疑と、瞑想の軋轢の中心となつて居る、信仰と不信仰の撞着の最中にアヽノードはカクスフオド大學に入學した。當時オクスフオードには「空中に偉大な聲が」響いて居た、といふのは當時の在らゆる懷疑を簡單な信仰に依つて解決すべしといふ「新人(ニユウマン)」の聲であつた、此解決に就いてアヽノードは後で、其樣な事は「出來ない事(インポシイブル)」であつたと大膽に言つて居た。斯くして父なる人の信仰の宿を出て急に時代の鬪爭の熱の中に沒入したアヽノードは不思議にもラクベイの敎へとオクスフオードの懷疑と双方等しく同情する事の出來る力を持つて居た。一體にアヽノードの性質は正確で、感情的で寧ろ宗敎的の調子を帶びて居たのだが、其れが一種峻嚴な氣質と冷い智識の中を流れて居る。感情の上からは彼れは信仰を要求しないけれども、鋼鐵の樣に固い鋭い智識は正確な解明と判斷を思想の上に求むる爲めに容易に信仰に屈服しない人であつた。

　であるから、アヽノードの詩の大部分は、やはり彼れ

の性質の内にある倒底調和する事の出來ない信仰と智識の爭鬪の反映に過ぎないのであつた。彼れは時折此救ひのない時の流の中に生れた苦痛に耐えないで過去を追懷して泣いたであつた。アヽノードの詩は斯くして生れたのである。左にアヽノードの「ドヴアの海邊」の口語譯を揭げて僅かに氏が詩の特質を向つて見やうと思ふ。

今宵、海は靜かだ
海潮は滿ち、月は美しく
海濱の上に。フランスの海岸に光は
耀いてまた消える。エングランドの懸崖は
廣く閃いて、靜かな灣から突き出づる。
窓へ來い、夜の風の心地能き所！
唯だ水烟の永い線
海の月色の白砂と逢ふ所に
聞け！小石の軋る音を
波は小石を持ち歸つては
其水を退き際に、高い岸に投げつける、
初めては止み、止んではまた初める、
緩かな、震へる調音をもつて
永久の悲哀の歌を持つて來る。

リフオクレスも嘗て
エイジアンでこれを聞いた
其響は人の心に攪亂の渦と流を持て來た
人の不幸の。私達も亦た
この音響の中にある思想を見出した、
遙かな北の海の音響を聞いて。

信仰の海は
一度は滿ち溢れてこの世の海岸を
耀く帶の褶のやうに取り捲いた。
が、今私の聞くものは
物憂い、永い引退の海の音

夜嵐の呼吸に、逃れて
荒涼の世の端
裸體なる世の荒石の彼方へ。

あゝ、愛よ　吾等計りも誠實ならしめよ
人にも吾にも！　何故なれば此世は
夢の國の様に私達を欺いて
如何にも變化ある、美しい、新しい國と
見せるけれども、實は喜びも愛も光も
正確も平和も苦痛の慰籍もないのだ
私達は此處に暗い平原に立つて居る
苦闘と敗亡の警報に追ひ立てられて
無智な軍はてゝに夜の内に戰ふ。

●納戸町女子青年會寄宿舎落成式概況

月の二十日、津田梅子、新渡戸マリ子、マクドナルド三女史の名前で一封の招待状が來た。「三十一日午後二時より納戸町新寄宿舎に於て落成式擧行致度候間御來臨御一覧の榮を賜はり度、此段御案内申し候……」とある。實を云へば此の夏葉月の半、生はマクドナルド幹事世良田舎監の方々と一所に工營將に終らんとする此の寄宿舎を見舞つて具さに其の狀況を聞知したのである。けれども「當日は文部大臣小松原英太郎君御來臨。尚大隈伯爵新渡戸博士の御演説有之筈に候」と云ふ追ひ書がしてあつたので三十一日の午後降りしきる秋の時雨を唯一人、寂寞の中霞み渡せる早稲田の田圃を打ち詠めつゝ江戸川の終點から電車に飛び乘つて佐内坂の方へと志した。

飯田橋で車を乘り換へると、丁度同じ式場に臨まうと云ふ東京青年會の山本主事に出會した。で其れから降りくる雨を二人連れ、鼠坂の方へと足を早めて小さな路地を右に折れた。刹那に輪々たる俥の響きが聞へて二臺の腕車は僕等の中央を通り拔ける。「伯爵………」機早な山本主事が先づ口を開かれた。「新渡戸博士

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

も……」今一人の男が語を呂合せる。其中に俥は新寄宿舍の門をくゞつた。我等も續て木造りの門を入る。

玄關口には五六臺の俥が所狹しと横着けになつている。之が往來の門口でもあつたなら早速巡査(マワリ)さんにコラ〳〵の一喝を頂戴すべき所であるげれども此處にはそんな忌はしい權威の濫用者などは一人も居やう筈はない。各自に道を作つて傘と足駄とを係りの者に預けて玄關に上ると、舍生の婦人が丁寧にスリッパを具へらるゝ。直樣導かれて式場に入ると、未だ定刻の二時には十分計りも殘つている爲か來會の人は僅か六七名しかない。やがて盛裝のレディーや日本服の淑女達が漸々と入場せらるゝ。青いガウンや黒のコート、紅白花冠の帽子や紫白(むらさきしろ)のリボン、此等の色彩美が入りつ亂れつ六間に十間位の式場は時ならぬ千草の花粉を匂はして居る。やがて黒田侯爵夫人三輪田眞佐子女史など其の他英米のレディー達が陸續として着座せらるゝ。男子側はと見ると山本主事や落合牧師を始めとして洋裝和服のものが僅々七八名にすぎぬ。元より女子青年會の事業には男子など別に關係のあろう筈がない。が特筆すべきは大隈伯の臨場と新渡戸博士の盡力とである。

會はかくて二時半とも覺しき頃寄宿舍委員長新渡戸夫人の簡單なる挨拶を以て始められた。「私は日本語はよく出來ませぬので、日頃非常に遺憾とし不幸として居りました。けれども今日の如き場合に於ては却て非常な幸福であると思ひます何故(なぜ)なら一度に二人の能辨家が居るのは、いつも面白くありませんからです。私は今日の司會を我良人に讓りたいと存じます……」喝采の中に席を下りて婦人席の一隅に着かれた。「刹那に新渡戸博士は只今家內(かない)から大役を仰せ付(つ)かりまして…」と例の罪のない笑顔を見せて一場の挨拶を試み落合牧師の詩篇第八十四の朗讀に引續き一枚の祈禱文やうの者を讀み上げられた。次に舍監世良田春子女史より寄宿舍の方針主義として飽くまでも愛と信仰とを中心として家庭的和樂の生活を送りたいてと現今舍生が三十五名て女子大學津田英學塾を始め總數十七校を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

代表して居ること」など簡明なる説明の後、平田敏子嬢より創立の狀況會計の報告などがあつて、新渡戸博士は一場の挨拶的演告を試みられた。一體此寄宿舍は英國の一貴族オーヴアーストン氏によりて建設せられた者で總費八千圓内五千五百圓は敷地代であると、尙今一つの寄宿舍を建つるにたるべき會計の餘裕あると、近々の中安藤坂に第二の寄宿舍を建設せんが爲に既に敷地として二百餘坪の空地の購入を了したることなどの報告があつて扨言葉を改め

「世には實に云ふに忍びざる誘惑物――一種惡の魔――が居て停車場や下宿屋其他あらゆる方面に蜜の如き甘舌を以て邪道に誘ひつゝある。寄宿舍は此の波瀾の中に一味の樂しき安住の場所を與へん爲てある。よし數に於ては少くとも我等は飽くまで信、望、愛の三つを以て此の世の風波と戰はねばならぬ………」

次てヂヤクソン夫人は清朗玉の如き美音を以て獨唱を試み四百の聽衆をしてそゞろに恍惚として地上以外の感あらしめた。拍手の響きは秋の日の靜けさを破りて場内暫しはどよめき渡つて見へたが、後は再び極度の靜寂に還つた。

此の刹那大隈伯は靜々と白髮偉大の體軀を運で中央なる演壇に立ち、今日此の席に於て一場のお話をすることは私の最も喜ぶ所である………」と云ふ一句の冒頭を置いて現代思潮と靑年子女の覺悟に就て約一時間餘の切實なる教訓的演説があつた（別項演説大要參照）

時は既に暮に垂んとす、新渡戸博士は起て伯の厚意を謝し來賓一同に對する挨拶があつて今日の會は目出度く閉ぢられた。四百に餘る來賓男女は思ひ〳〵に式場を出でゝ食堂に入る者あり友人知己と交情を温むる者も居る。生は此夏休の前迄同じ寄宿舍に起居を共にして居たグレシツト氏と手を握つて一別以來の挨拶を濟まし、新婚以來俄に若返りせられましたねと大笑する。折しも接待の一女學生は丁寧に紅茶を僕等の前に運で來た。やがて茶菓の饗應などもあつた。グレシツト氏とは月曜の晩屹度僕の寄宿舍を訪問する」と堅く約して別れたが、僕も序でだから一應舍生入舍後の景况

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を見たいものと一人の案内者を得て各室を一周した。進めらるゝ儘に奇麗な七疊敷の疊を踏んでみると、成る程女子の室は奇麗で萬事がしんみりとして居る。が七疊に三人とはちと苛いと思つたので「あなた方は一室に三人ではお困りなさることはありませんか」と尋ねると「いゝえ別に……」との挨拶である。「床の間のないのは何より惜しい……」と獨語して廊下を傳ひ深く案内の勞を辭して玄關に下ると、不思議や再び山本主事の一行に出會した。

客人の殘餘は尚ほ玄關に近い食堂のほとりに立ち騒いで居たので、別に「左樣なら」の必要もなく小止みとなつた時雨の夕に寄宿舍の門を出ると、四邊には既に瓦斯燈の光りが雨中に寒むう輝いて居る。寄宿舍からは今三臺の車が歸りを急ぐのである。

「大隈伯の今日の演説は懺悔と感謝との纏綿した演説であつた」と一人が云へば「新渡戸博士の今日の司會は西洋人七分の會衆にとつては隨分骨の折れたとに違いない……」との聲が起る。兎角の內に足は近藤氏の邸宅を右に折れて電車道に出ている。雨は止んだが馬鹿に寒い。飯田橋で山本主事と別れて江戸川行の電車に打ち乘りさま早稻田の古巣へと急き歸つたのは彼是六時に近い頃ほひであつた。紅茶の香りの消えぬ間にと消えなんとする燈火を掻き立て〳〵急ぎ此の一文を綴る　（十月卅一日夜半一記者）

時代思潮と青年子女の覺悟

大隈伯爵

私は勿論キリスト教徒ではない。從て未だ基督教的信仰と云ふものを有たぬ。蓋し私はまだ神學と云ふものを知らない。神と人間との關係を明に知らぬものである。けれども先き牧師の方か朗讀せられたバイブルの一節及び御祈禱の辭句などは謹て拜聽したのである。のみならず私とても嘗ては或一米人に就て英語の研究を始め聖書も暫くは味つたものである。で今に其の一部分は記憶に殘つて七十歲の今日に至る迄矢張り遵守して居る部分も少くはない。と云つても先き申し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

上げた通り私はキリスト教徒ではない。誠の道に我が精神を置いて、一念此の中心生命に向て猛進したいと勉めて居るのである。

昨日私は國學院大學の招待に應して神道の集合に臨だことであるが、何分榎本子爵の葬儀があつたので眞の數分時の間「神の道はやがては之れ君の道である天子祖先の大道である」と云ふ意味で話しをして置た、が勿論其の席には神官などが幾らも居たて如何かすると私は神道の一人であるやうに見られたかも知れぬ。が榎本子爵の葬儀は子爵生前の關係よりして純粹な禪式であつた。此處でも私は禪的の引導をして榎本子爵の肉體を寂滅有樂の極樂園に送り、香を焚き禮拜をして還つた。其前日は御承知の通り野津大將の葬式である。此の日の儀式は嚴格な神道の儀式で、神官が宣文を讀み供養の魚餞を捧げ極めて壯嚴な祭式であつた。私は四年前までは腰に大小を横へ、髷を結て上下袴て通したものであるが、今は此の通り洋服を着て此處に立つて居る。或は西洋人と見違へられるかも知らぬ。けれども、矢張私は日本人である。此の席に臨まれて居る黒田侯爵の夫人は日本服を着けて居らるゝ。今の世は實に不思議な程珍らしい過渡の時代である。

要するに現時日本の思潮が、總ての方面に於て過渡時代に彷ふて居るのは疑ふべからざる事實である。殊に社會の狀態風俗なるものに於て其著しきものあるを思ふ。現代に於て習慣風俗なるものが、一國文明を形成する上に就て、多大の力あるが如く、アングロサキソン今日の文明は基督教家庭の力に依ること實に多大なるものがある。今や日本の古き總ての宗教は其があらゆる權威を失ふて、新らしい宗教は未だ其が萌芽を現はさず混沌擾々たる有様であるが、之は何も宗教とのみ限つたわけのものではない。日本社會の風俗習慣の總てが動いて居る。云はゞ過渡期にぶらついて居るのである。現時日本社會の狀態は著しくアングロサキソン文明の餘響を受けつゝある。大なる變化を經過しつゝあるのである。然も變化は必ず良い方面に向て居るのに相違ない。が然しだ。此の變化發達の徑路に於

て幾多の誘惑幾多罪惡が伴つて來るのである。人間に就て考へてみてもさうだ。人は――男女に限らず――二十歳前後が一番に大切である。危險である。此時期の前後に於て稍ともすると人は一生の計を誤ることが少くはない。世の青年女子たる人々は此の際大に注意して貰はなければならぬ。

が、人は各自希望といふものを有つて居る。然し此の希望と云ふのは一種の慾望である。理想と云ひ望みと云ふ皆是れ一種の慾望である。此の慾望が達せられないと人は種々にして失望し落膽する。之は極めて宜しくない。人は飽くまでも戰はなければならぬ。終局まで持ちこたへて奮鬪する勇がなくてはならぬ。

けれども諸姉は實に幸福である。幸である。之が二十年前であつたならば如何でしやう。此の如く立派な寄宿舍の形成は決して容易は事業ではなかつたのであらう。いや、之が若しも四十年前の時代であつたならば其れこそ世間の人が只は置かぬ。直ぐに腰なる一刀引き拔いて、切つてかゝらないものでもない。けれども皆樣は眞に幸福だ。幸な人達である。立派な舍監の指導の下に、日々祈禱に依て神に近づき世俗の誘惑荒波の泡沫を餘所にして、實に溫かい平和な家庭の中に勉學の途を講ずる。諸姉は實に幸福な時代に生れ合つたものと云はなければならぬけれどもなか／＼幸福と云つても安心は出來ない。皆さんがお婿を貰つて家庭の人となつた場合には、或は思はぬ苦しみを見るかも知れぬ。親が神道であり兄弟姉妹が基督教信者でなかつた爲に、萬事に苦しみを受け、拘束を感ずるかも知れぬ。然し、其處が又婦人の忍ぶべき所である。辛棒を要する所である。飽く迄も希望を以て一身を處理して貰はねばならぬ所である。斯くして撓まず屈せず進て行つたならば、十年の後には乾度親兄弟の心を和げ「眞に愛すべき嫁よ」と慕ひ求めらるゝ時期が早晩落ち來るに相違ない。よし十年ならずとも一生涯を賭しても、之だけは婦人として是非やつて貰はねばならない。

家庭の狀態も左樣であるが、思想の流れも亦今や泡

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

渡時代に接觸して居るのである。舊思想と新思想、之は現時互に相衝突しつゝある。前き新渡戸博士も話されたのであるが、私は左程まで烈しいとは思はないが——然し都下には色々誘惑の分子が多い。下宿屋などは最も左樣である。私は西洋に行て見ないから知らむが、ロンドンやニューヨークなどでは、下宿屋のお婆さんなどが、嚴重に生徒監督者の地位に立て居るさうである。此の點は日本人の大に彼等に學ぶべき所であらうと思つて居る。云ふまでもなく皆さんの家庭は富裕であるに違いない。けれども人の運命といふものは如何樣に變化するかも知れない。若しや萬一不幸な場合に遭遇したならば、下宿屋の主婦として地方の青年子女を擁護し、幾多無垢の青年を恐る可き誘惑の外に救助してやるのも、又人生最大の快事ではないか。私は先日青山女學校に近い一寄宿舍の落成式に臨て、非常に其の壯擧を喜て來たが、斯の如き宗教的意味の寄宿舍が外國紳士の手に依つて經營せられたと云ふ事實を聞いて、私は衷心慚愧の情に耐へないと同時に、深く感謝の意を表するのである。どうか此の寄宿舍が健全に發達して眞の目的を充分に實現せんことを望むのである。

「此の一篇は大隈伯が納戸町女子青年會新築宿舍落成式に於て試みられた演說の大要を、記憶に任せて書き綴つたものである。題號の撰擇と一切の文責とは勿論記者にあることを承知して貰ひたい」

水の精（承前完結）

英學塾講師 辻村靖子

或日夕がた少女は夫のいさなふまゝに柔順に戸外へでて行きました。もうみちばたの露草も萎れ虫の音もうら枯れて、さしも月日を蔽ふたほどの大い森林も落葉して、みるめさびしく姿はすつかりしもやせて、あれほどに漲り狂ふて船路もたえた、湖の水も枯渇きて、流の末は細くなり、蓬の白い河原みちに兀々と石はてゝ居るのです。其著るしい變りやうを、二人は物云はずに打眺めながら、徐に草を折りしいて、溪河の畔

の石に踞けました。

「月日の經過つのは早いものだね、私がこゝに迷ひ入つてから、かぞへてみるともう二月餘、眞青であつた梢もきはんて、もう鵙の音もきこえてきた。あゝ都では私のことを、何と噂をして居るだらう、……」

少女はきかぬふりをして、向をむいて何とも云はぬのです。みれば目には涙の露を湛へ、唇をくひしばつて霎時沈默つて居たのでしたが、やがてそつと目を拭つて、

「貴郎こゝに今まで逗留しつたのは、歸ることがてきないで、據なく居らしつたのでしやう、夫に今は道林徑もでき、湖水も波が穩て、どこといつても危險くはなし、貴郎は近くお出發なさるのですね、貴郎がかへつておしまひなさると、私はこれから、如何しましやう。

「癡呆を云つては不可いよ、私一人でどこへ行くものか、和女は私の行くところへは、どこまでもついて來て吳れるのだ。其いづじやないか恰影法師と形とのやうなもので、離れやうと云つても離れられる者ぢやあない、おまへは私の妻ぢやあないか。

「でも若し、私が……私が、人間でないとしたら、貴郎どうなすつて、きつと可厭になつて一人で行つておしまひなさるに相違ない。私夫を思ふと……あゝ夫を思ふとどうしたら可いかと思つて……心よはく男の腕にすがつて音聲を立てゝ泣きだしたのです。須臾して、しぼるやうな、手巾て、面を掩ふたまゝ、

「貴郎もうお忘れなすつて？こゝはあなたが初めて入らしつた彼の夜に、私が一人露宿して、其あけの朝父さんと、一所に迎へに來て下さつた栜の樹の蔭です、あゝあの時分が私はこひしい。あゝこゝが貴郎と逢ひ初めの、そして亦逢ひしまひにならうどは知りませんでした。私はなんだか名殘をしい、かうやつていつまでも、あなたと一所に棲みたいのにねへ

「あなた心を靜めてよくきいて下さいな、この宇宙には目にみえぬ、神さまのあることを知つて入らしつて、林の中には木魂かあり、海にも水にも湖水にも、

水神河伯が棲んで居るのです。その水の巨靈さまは、漫々たる海のそこ、砂や岩や繁茂は恐ろしい魚藻あつて、泳いで居り、奇麗な紫貝が棲んで居る、深い凄い所ろに、好んて徜徉して居らつしやるのです。春秋はしらず、生き死もなし、何一つ不自由なしに、樂しく生活して居るのてす、か、只一つの不足と云ふは身體許りて靈魂かない、自分はもう詮方がないか、どうぞ一人女には、貴い靈魂を與へたいと思つて、一族よつて相談したのですか、之は到底自分同志ては望んだ所か不可能だ。只人間の愛を得て、夫を結んで靈魂を、得るより外はないと云ふのでした。そこで女を心つよく棄てゝ、人の家に養はせて、無量の苦勞をなめさせて、遂々夫をもたせたのです。私はなまじい愛を知つて、すくにあなたにすてられ、舊の棲居に立かへつて、永いこと行末を涙の淵に棲めるのです。之もみな自分の罪、人を怨もうやうはなし、私のやうな非類のものに、須臾てもそふて下すつたのこと私はうれしう思ひます。

私貴郎に捨てられたら、此河にとびこんで、舊の棲家にかへります。此小河は私の叔父で、何千年こゝに居て、小河に慕はれ尊敬され、大勢力を有つて居るのです。私か未た幼かつた時に、連れて來たのも叔父ならば、婚禮の夜に立合つて、ついて居て呉たのも其叔父です。私は一體此はなしを、久しく久しく知らなかつたのです、が、やつぱり山や水か大好きて、毎日遊に行き行きして、叔父にあつて、もうすつかり、自分のことをきいたのです。今叔父さんに連れられて、舊の棲居にかへつても、兩親は叱りはしません。靈魂と云ふ立派な土産を、もつて歸つて悦はせるのですもの。雖然私は名殘かをしい、もうあつちの人になつて仕舞へば、父さん母さんにも逢へないし、貴郎のそばにも居られないてしやう。」

涙と共に云ふ一回一回恐ろしいとも訝しいとも、哀れとも云ひやうのないので、郎はもうきいて居られなくなつて

「あゝもう何にも云ふて呉れるな。よく私は了解つた

たとへ和女が神であらうか、非類であろうか、神にちかつた大切の妻た、よし此山か崩壊れ、此湖水か涸渇れつきても、二人の中は決してかはらぬ。たとへ肉體かつき亡びても、互の靈魂は結ひついていつまでも離れぬのだ。ね和女も其位の覺悟はきつとあるだらう。考へちがひをして呉てはならないよ。

少女はうれしさに口もきけません。打うなつくさまとりすかると、其額髪か涙とともに、雫々と郞の膝へかゝるのでした。

此新夫婦か草の舍をてゝ、新生活をひらくべき日がもう迫つて來たのです。苟の別離とは云ひ條、今まて片時も離れたことがない、親子仲でしたから、老爺さんも老媼さんも、昨夜から眠られはしませんあければ好な食物をこしらへるやら、衣服や髪のかざりたて、何呉と心をつけて、別離かたそうに立よつて、右から左からせわをやきます。

少女ももう支度かてきて、以前夫の騎つて來た、白馬に扶乘せられて、馴れし棲居たをふりすてゝ、榮華の多い苦楚の多い、浮世のかどてをするのです。

「父さんも母さんもさやうなら。私向へいつて落ついたら、すぐに迎へにまゐりますよ、きつと來て下さるてしやうね。」

「おう行かずにはたよりのくるのを待つて居るぞよ」

「よく途中氣を付けての。」

千萬無量の思をこめて、いつまでも見送つて居る兩親の顏が、眉か目かはちかつかなくなるまで、顧みかへりみ、いてたつのてす。青年もさすかに思いての多い、忘れかたい草の屋を、見かへり見かへり立ちいてたのです。徑は段々折曲つて杉の木立の影にくらい谿流の幽かにきこえる所まで來ると、とんと今まで氣かつかなかつたのです。此人數の外に今一人そしらぬ僧侶か連れたつて、後になり前になり影のやうについて來たのです。少女はみさとくみつけると、夫に知られまいと思ふかのやうに、顏をさつと紅めて、

「あれ叔父さん、――どうしてあなたは隨從て來て。」

「私が隨從いて來たと云ふて、なにをそんなに可厭かるのか？
「否そうぢやないのですけど私は夫にみられたら………、夫か……夫か何より辛苦いのですもの」
「可いぢやないか、私は和女を何處までも、保護する——義務を有つてをる。俺がみちすがら守つてやらすは、森林の靈と、地の靈と、百方な障礙をして、和主ら三人あとにもさきにも、行きえぬやうな目に遇はうか、」、
旅僧は一歩さきになり、青年は草鞋の紐を結び直す爲て、すこし後れて急足で來てみると、見知らぬ怪僧と我妻とが、直々と寄つて物云ふて居る妻は辛苦そうに悸々して云ふことはきこえぬが、怪僧が今云ふた音聲は音聲が雷霆のやうにきこえたのです、必定前の森の妖魔！と思ふや否、青年は、墓地にかけつけて、佩劍に手がかゝるより早く躍りかゝつて拔うちにと斬りつけました、怪しの人は眞二つになつたかと思ひの外、さぎりと斬るやうな手にたへて、勢餘つて蹴つまづいた身體は、宛然白雨を浴びたやうに、ぞつぷりと濡濯れて、雫が滂沱と垂るやうです。すると遙の梢の上で、
「聟殿、必ず短氣なことをせられな。私は決して腹たてぬ、咎めだてもしませぬ。よく氣をつけて此大森林をてゝ、最愛しい妻は、とこまでも保護してやつて下され、賴みますぞ。」聲斗しては狹霧の內に消えて姿も亦見えなくなりました。
この靈の加護によるか、今度は何の不思議もなく、自然にひろい徑にでゝ、暗黑いこだちが明るくなり人家が白くみえ初て、ほつと息をついたときは、もう夕陽のかけは山のはに沈んで、夕かぜがみに染ことさえわたるころでした。

＊　＊　＊　＊　＊

彼の試合があつて後、公子が急にみえなくなつたので、町中は非常な騷になり、彼の勇氣をほめたたゆる人、其の擧動を賞贊する人、口々に惜まぬものはありません。まして彼の從者の當惑は、主人に離れて歸る

方角もなく、と云ふて例の恐しい森に行つて、探險するほと勇氣のあるものでなく、また國へかへりもせずに、旅宿に逗留して居るのでした、所かあれからの大嵐あり大洪水、どうしても彼の美少年は、あれきりかへらぬ客になつてしまつたに相違ない。

翠もあまり評判がたかいので、胸をたゝいて口惜しかつたのです、彼女は養親につれられて、近く其本國へかへらねばならぬのですか、どうぞもう一週間、もう五日、せめて其人の生死が明瞭とわかるまて、どうぞこゝにこ置いて下さいと固く執つて動かぬのでしたまてども待てどもをとつれはないので、とうとう思ひにたえかねて、之も自分を戀慕ふてをる、青年の一人を談合ひました。

「私無益いことを云つて、彼人をとんだめにあはせてほんに罪なことをしたと思つて、氣になつて氣になつてしかたかないのですよ。　あなた私を可愛そうたとおもつて下さるなら、　他人かあれから生きてか死んでとうしたか探索して少うしても消息かわかれは、もう夫て私は安心して、………そして貴郞のことは私眞實に難有いと思ふのです。」

と嬌態をして見せて、しみしみと依賴んだのですか誰も二の足をふんて、「私か行つてさがして來やう」と云ふえらい人もありません。

それはそうでしやう、若其人か森の中て斃死んたものなら、自分も求めて死地につくやうな、馬鹿らしいことはしないでしやうし。若し生存へて居るものとすれは、自分も命をかけて居る其戀人の競走者を自分て媒妁して伴れてくる道理ですもの、そんな不利益なことを何でしましやう。(をはり)

小塔

坪田城山

波はドーン〱と淋しい音をくり返してゐる。夕陽は北に向て聳え立つ黑い〱斷崖を淡く染めて、風はブーと呻りながら吹いて行く。斷崖の高さは三丈餘

り、入り込んだり突出したりして、碎ける波の白い筋と共に東から西へ長く〳〵果てしなく續いてゐる。其崖の下を僅の干潟をたどつて岩の上を飛び〳〵に西へ歩いて行く母子二人がある。母は四十位、赤い、もつれにもつれた髮を無造作に束ねて、大きな籠を負つて細帶一つで足の半迄の草履をはいて、あちらこちらをキョロ〳〵見回しながら磯に打ち上げられた木片を拾つて籠に入れ拾つては籠に入れして急いでゐる、子は十一二、やはり籠を脊負うて母よりは先へ勢よく、走る如に行く。

崖には澤山の穴があいて、其には大抵鳥が巣うて、白い糞のすぢを下へ引いてゐる。崖の下には岩が色々な形をして群り、其上には鷗や海燕(つばめ)が集て、ク、、、と鳴いたり、互につゝき合つたり、翼の下へ首を入れて休んだり、一寸羽ばゝきをして物々しげにクヮーと鳴いたりして遊んでゐる。

陰鬱な波は遠くからムク〳〵と頭を上げて夕陽にきらめきながら押しよせては其一端からサヾヽノ――とくづれる。と後から直に他の波が頭を上げて、サヾザザ――とくづれる。後からも後からも皆同じ事をくり返し、磯に近づいて、大きな岩にド――ンと當つて碎ける。サッと上つた飛沫(しぶき)はキラ〳〵と輝きながら、北風に吹きつけられて四方に飛散する。波は又ザ――と引いて行く。と波にぬれた岩は一増淋(しほ)しげに夕陽を照り返す。

二人の近づいたのを見た鷗の一時にバッと飛び立つて海上高く舞ひ上つた。が漸くしてスウッと下りて來て崖の中腹に列んでとまつた。波の上でウッキ〳〵やつてゐるのもあつた。

二人の裾が風にハタ〳〵と鳴る。少しく行くと、大きな岩が兩方からもたれ合つて、奥の暗い洞が出來てる所に來た。子は其中をのぞいて見た。と中には藻や水母と交て木片も澤山あつた。て子は其をあさり散してセカ〳〵と出て又急いだ。

波打ち際が少して沙濱になつてゐる所へ來ると子は「ア――アくたびれた」と云つて、さも疲れたらしう

がつかりして沙の上に腰を下した。母は後から來て「お前くたびれたなら、こゝて待ておいて、お母さんはあの角迄拾うたら歸てくるから」と云つて置いて、サッサと歩いて行つた、子は何とも答へないで沖の方を見てゐた。空を一面に覆ふたグルーミーな雲は海を壓するが如に底う運つて、海の果、波と雲との間を煙を吐いて行く船がある。見てる間に船は隱れて、煙だけが尾を引いて殘る、其も直に消え失せて了ふ。

　子供は船も煙も消え失せて了つたので、目を轉じて母の方を見た。母はセッセと拾つて行く。て處作なさそうに、投げ出した足の前迄も打ちよせて來る波に見入つた。波はよせては返し、よせては返す其間に目に見えない程僅滿ちてゐる。子供はやがて手を伸して、其邊の小石を拾ひ集めた。そして下してゐた腰を上げて少しく傾斜をなしてゐる海を平にして、少さな塔を作りに取りかゝつた。先づ小石の大きなのを土臺として四角に并べ四角の中には沙を入れ、周圍には石をつみ上げ石をつんでは沙を入れた。塔が少しく高くなつた所、未だ少しく危く見えたので、周圍に沙をもり上げて、少さな沙山を作へ、其上に又石をつみ上げた、と波は次第に近よつて、山の裾をくづし始めた。段々とくづして行つて遂には皆くづして了つた。て次に來た波は波をスッカリさらつて行て小石だけ後に殘した。が其次の波に小石もなくなつて了つた。子供はブツ〳〵小言を云ひながら、今度は少し大きな小石を集めに取りかゝつた。夏蜜柑の大きな位なのを、七つ八つ土臺として、又始の如に塔をきづいた。と波は段々第二の塔へも近づいて。其裾の沙も一波ごとにさらわれて、三番目の波の時には石ばかりか骨の如に立つてゐた。骨も直にくづれて何處へ行つたか見えなくなつて了つた。子供は又第三の塔に取りかゝつた。石を集めて、これから土臺をすゑ樣と思つて、フト氣付くと、夕陽は早や隱れて了つて、唯其餘光が空の雲を黃に染めて四邊には薄い闇の霧が下り立つてゐた。俄に淋しくなつて子供は持てゐた石を投げすてゝ、西へ少しく走つて、「お母あ」と叫んだ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

崖のつゞきはおぼろに闇に閉れて、波の碎けるのがよく見えるばかり、お母あの聲は空しう響いて、何の答もない。四邊は次第に暗くなつて波の音は今更の如に小供の耳に聞える。風が崖を過ぎて吹く、子供は泣聲をしながらお母よ〳〵と幾度も〳〵叫んだが、答はなくて崖の上て鳥が、バタ〳〵と羽ばたもをして、クヽッと鳴いた。波はドン〳〵と淋しい音をくり返してゐる。

次號豫告

來る十二月發行の本誌は、例に依りクリスマス號として、成る可く趣味ある通俗平易の讀み物を掲載せんと思ひ、夫々執筆依頼の手續を了せり。想ふに來月の本誌は四十一年度の最終の一卷として光彩陸離優に一種の特色を發揮して遺憾なかるべしと信ず。記者は本號校正の時に際し、既に確定せる次號掲載の讀み物として、左の題目を公表することを得るを喜ぶと同時に、寄稿家諸氏の厚情に對して深く感謝の意を表せむと欲す。

▲パウロの宗教的生活……柏井園氏
▲幸福の積極面と消極面…ギルバート、ハマートン
▲不滅（小說）……後藤淺香君
▲クリスマスの夜……ヴヰクトル、ユーゴー
▲郭公の生ひ立ち……井芹節三君
▲ホーソンの裁縫論……藤袴君

此の外尚ほ執筆依頼中のもの左の如し

お伽話……巖谷小波先生
題未定……津田梅子女史
同……河井道子女史
同……辻村靖子女史

爾の信仰爾を癒せり

（上）

櫻喬生

生は今、聖書を我が唯一の友とし慰藉として、日夜靜かに其が無限無量の福音に接して居ることを告白する。

此の頃、さる年若き憐れなる母子が、人世の荒き波濤にもまれ〳〵て、寄る邊なき葉船の如く今にも壞れさうな體軀を波頭に任せ、悲哀苦痛の海洋に漂ふて居る有様に接しては、「女よ心安かれ、爾の信仰爾を癒せり」とキリストの宣ひし馬太傳九章第二十二節の一句が、我れ知らず胸裡の琴線を動かすのであつた。

思ふに人は誰一人として絶對に健全なるものはあるまい。必ずや多少の病は有つて居るものである。鼻かつまり眼眩み、體衰へ諸機關の作用は妨止せられる。のみならず、精神的靈能の上にも猶ほ幾多の病源を有つて居るものである。絶へず吾人の心身に逼つて朝に夕なに我等を苦しめ惱ましむる病苦は數限りなく進撃してくる。けれども我等人類に、此等無數の魔軍に對して如何に處斷しつゝあるか。單に一時的災厄を遁れ、眼前の境苦を脱却せんとして、彌縫的姑息の療法を採用しつゝ居るのではあるまいか。

云ふまでもなく肉體上疾病の療法に就ては、少くとも二種の手段方法が用ひられて居る。一は熟練なる醫師の診察を乞ふて眞面目に根本的に病根を絶たうとする慾求と、今一つは單に自己一身の力に依て自己身心の病

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

苦を除去せんとする方策とは之てある。兩者の優劣是非の判斷に就ては暫らく別問題として、人は必ず醫師の許に馳け付けて何も「鶏口を裂くに牛刀を用ふる」の必要はあるまい、けれども耕は以て農に問ふべく商は以て市人に問ふべしとすれば、苟も眞に肉體の慰安を得たいと求むるならば、吾等は速に良醫の許に馳せ、自ら進て其が治療の手術を受くべきではないか。

或る所に一人の富有な婦人が居た。所て此の婦餘程のヒステリー質と見へて些末のことにも早急醫院に馳け付け、其が治療を求むるのが常であつた。或る日のこと一個の小さな荊棘が彼の女の爪先を刺した。何だか其の荊棘に刺された跡が薄紅色を點して異様の色合を示して居たので、婦人の驚愕は一通りや二通りではない、「さあ大變」だと云ふので早速行き慣れた病院に馳け付けて醫師の診察を求めた。醫師は可笑うてならぬ。不斷から機會があつたら此の婦人を攻擊してやりたいと考へて居る眞中であつたので、今日こそと何喰はぬ體で、「ははあ、まあ良うこそ急いてお出て下さいました。之が若しか六時間後のことでありましたなら私は危うく大事な診察料を取り損ねる所でした………」と笑ひ崩れたと云ひます。成る程婦人が些末なことをも輕視せない心掛は實に神妙だ。神妙ではあるが、然し、此の如く些末な――醫師に笑はれる程の――肉體的故障を氣にする婦人子女が、身に負ひ切れぬ程の苦しみを受け、致死的創夷に悩みながら、倘ほも靈的醫師の診察を求めないのは一體何故であらう。私は世の青年子女の中て、此等一切の心靈的痛手を全然感知しないものがあらうとは如何しても考ふることが出來ぬ。否世の中には社會組織の上より觀ても、必ず精神的醫師の診斷治療を要すべき病苦が數限りなく存在して居る筈である。が悲しいことには人類共通の矛盾的病根は、斯かる部面にも明白と表示せられて居る。肉の病を治するに日も之れ足らざるものは、豈彼のヒステリー的一婦人とのみ限るべきであらうか。萬人が萬人悉く然うとは云へぬが、其の大部分――少くとも其の過半數は此の數例に洩

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れない輩であらう。然も一人として靈の惡魔、精神的病苦の治療を神に祈り求めないのは、抑亦何故であらう。私は竊に青年男女の方々が――肉體治療の第二法たる――賣藥的手療法を試み巧に彌縫的策略を講じて一時を濁して居るのではないかと恐れる。

此の點に於て、今引用しやうとする馬太傳第九章の一節は、最も各自の胸琴を鳴らして深き考察を要すべき重要の物語であらうと思ふ。否少からぬ教訓――生ける新らしい――模範を示せるものと信ずるのである。

イエス起て彼に從ひ其の弟子と共に行く、十二年血漏を患へる婦、後方に來りて其の衣に捫れり。蓋し若し衣にだも捫らば愈むと意へばなり。イエス振り返り婦を見て云ひけるは、女よ心安かれ、爾の信仰爾を癒せり。即ち婦この時より癒ゆ。………（馬太傳九〇二二）

十二年血漏を患ひたる女。彼の女はイエスが弟子と共に通行せらるゝ後姿を觀て、衷心の信念抑ふるによしなく、遂に馳せ付けてイキスの衣の一端に捫つた。蓋し、彼の女の眞意は聖句にも現はれて居るやうに、イエスの衣にだにも捫つたならば、必然愈さるゝことを確信したのである。此の確固不抜の信念を懷いて主キリストの衣に捫つた可憐の一少女は、果然此の病よりして拭ふが如くに癒された。此の時である。イエスは喜悅溢るゝ婦を靜に顧みながら「女よ心安かれ、爾の信仰爾を愈せり」と賞讃の辭を與へ給ふたのは。あゝ十二年の間血漏に惱み苦むで居た女でさへ、一念燃へ立つ信仰の熱情に救はれては平穩な健康の肉體に立ち還つたではないか。ましてや世俗の紛々たる病苦――心の病たると肉身の病たるとを問はず――如何なる苦しみ如何なる惱みも、一度心よりキリストを崇めて我等の活ける救主として信賴服從する一片の赤心だにあらば、總ての病すべての憂は當然愈さるべきではあるまいか。我等は信仰の一念に依りて如何なる病苦も、如何に烈しき桎梏の惱みも早晩解脫すべきことを信じて疑はないものである。

試に歷史を繙いて東西古今の偉人傑士の跡をみよ。一人として自己の力のみに依つて大なる偉業を後世人士

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の上に殘したものがあるか。リンコーンやグラッドストン、ミルトンやチョーサー乃至はクロンウエルやナポレオンの如き武斷派の人々に就て觀ても、深く天地自然の機微を穿つて、一念神の中心に觸れて居た事實は青史の明に證明する所てある。但し今述べたクロムウエルやナポレオンの如きは嚴密なる意味に於ては人格的偉人として推擧するには如何てあるかと思ふ。けれども縱令品性高き人物てないにしても、ナポレオンの如き五十年の生涯を殆ど修羅戰塵の中にのみ過ぐして、宮闕溫まるの餘裕なき生涯に立つて居ながらも、尙ほ神の觀念に到達して居た事實は、決して掩ひ隱すことは出來ぬ。――勿論セントヘレナ謫流前のナポレオンは單に一種の宿命說を信ずるに過ぎなかつたとは雖も――一夜艦上に立て佛の國土を去り、艪のやうな夕の海を南方遙かに馳つて居ると、部下の青年將校連が甲板に立ては切りに神がある神が無いのと口角泡を飛ばして一場の議論をおつ始めた。其の時傍に立つて居たナポレオンは、靜かに天空を指さして「友よ先づ彼の天空を仰げ、あの輝々として輝いて居る星の光は、そも〱我等に何事をか語れる。神の有無を論せんよりは須く先づ仰いて群星の默示を聞けよ」と云つたさうてある。意味深き一語てはないか。一武夫たる彼れに於て此の美妙の言葉あらうとは吾人の聊か奇異に感ずる所てある。けれども回天動地の大業も決して此の根本思想を離れては成立し得ない。一念美しい此の感想を無にしては到底眞に生ける生涯を樂むことは出來ぬ。十二年血漏に惱める婦の物語は我等に深き印象と强き信念とを與へて餘りあるものと信ずる。

生は更に四福音書の隨一と數へらるゝ約翰傳の一節――葡萄樹の例――を以て、今少しく我が衷情の感想を申し述べてみたいと思ふ。

（下）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

我は眞の葡萄樹、わが父は農夫なり、我に在て凡て實を結はざる枝は父之を剪除すべて實を結ぶ枝は之を潔む。蓋ますく〱繁く實を結ばしめん爲也。今汝等我曰し言によりて潔なれり。爾曹我に居れ、さらば我亦爾曹に居らむ。枝もし葡萄樹に連らざれば自ら實を結ぶこと能はず。爾曹も我に連らざれば亦此の如くならん。我は葡萄樹なんぢらは其の枝なり。人もし我に居り我亦彼に居らば多くの實を結ぶべし。そは若し爾曹われを離るゝ時は何事をもなし能ざれば也………(ヨハネ第十五章一五)

神と人との關係を最も能く理解の行くやう、合點の出來るやう、丁寧に親切に說き示してあるのは今此處に引用した葡萄樹の例證であらう。此の一節は約翰傳の中でも信仰の根本的問題として特に注意を要する個所であると思ふ。

「我は葡萄樹汝等は其の枝なり。故にもし汝等我れに居り、我が枝の一部分であつたなら、多くの實を結ぶことが出來る。そは父なる神が農夫として高價なる肥料と溢るゝ斗りの慈愛とを下し給ふが故である。」我等は此の偉大なる葡萄樹を離れては眞に意義ある生涯を依續することは出來ぬ。人は須く神と合一し融和して一體とならなければならぬ「汝等もし我に居らば我亦汝等の中に居らむ」とは約翰傳の記者が殊に力を用いて描寫した特得の信仰的表白てある。否、キリストイエスが我等に示し給ひし一大恩寵一大福音である。神人和合の結果はやがて絕大の力となつて現はされる。我等は神と遠かり父の御許を離れては決して一事をもなし能はざるものである。

斯く云つたらば必ず反論が一部の人の口を突いて湧き起つて來るてあろう。「世には隨分神を知らずして巨萬の富を重ね、權門豪家の地位に上り、榮華の夢に浸つて此の世を樂觀して居るのもあるではないか。何も事業をやり富を作る上に神の必要はあるまい……」成る程其れは事實らしい。否、世には却て神を知らない爲に——或

は神を捨てた爲に――富裕の地位に上つたものも少くはあるまい。けれども此等はさして我等の前には高價のものではない。何となれば此等は浮動的性質のものである。相對的價値を有するにすぎないものである。巨萬の富千百の黄金を藏めながら猶ほ天災飢饉の爲めに餓死凍結したる例證は幾らもあることである。況や一朝天變地象の災に會つて家は燒け財貨は滅び貧者に劣つた境涯に沈むことがないとも限らぬ。かゝる場合に於て彼等の價値は抑幾何であらう……「あゝ財を恃む者の神の國に入るは難いかな。富者の神の國に入よりは駱駝の針の孔を穿るは却て易し」とは三千年の昔、キリストがさる富豪の子弟を戒め給ふた言辭ではないか。と云つても、誤解されては困るが、生はあながちに富める者を賤しみ輕むずるものではない。たゞ富其の物を以て吾人のなくて叶はぬ唯一の貴重品であるかのやうに思考するのは之れ大なる誤りであると云ふのである。もつと明確な言葉を以て云へば、世には金銀爵位榮譽などよりは、ずつと立勝つて貴い、神の御心を喜ばしむる何物かゞ潜在して居ると云ふのである。然らばそは一體何物であらう。哀心より神に依り頼むことである。純にして美なる信仰を得ることである。言葉を換へて言へば、神に依て眞に生きた大なる「我」を見出すことである。之が恐らく人生最大の要務であらう。

世には世俗の事物に齷齪して居る爲に自己畢生の特質を發揮することを得ずして、無意義の中に此の世を終るものが幾ら居るかわからぬ。彼等は極微の我、夢うつゝの如き小我に束縛せられて終に眞乎の我を沒却するのである。覩よ人は思ふ存分現世の榮華を極め、高官高位に上つて此の世を面白可笑しく樂しむで居ても、眼一度閉ぢたらば如何である。杳として其の聲を止ないではないか。靈肉共に暗黒の世界に的もなく彷徨ひ迷ふて居るではないか。然し之が直に神に依つて自己を見な、自己の中に神を認めて居るものにあつては、よしや身は孤島落寞の裡にさすらつて居ても、決して寂寥苦痛なるものを知らぬ。眼閉ぢ肉體地中に埋るとも、彼の

靈は決して死なゝい。榮光みち〳〵たる天の御國に永遠不死の境遇を見出すことが出來る。

然らは此の不死的永遠の生命はそも〳〵何處より求め來るべきであるか。此に至つて我等は再び芳香馥郁たる「葡萄樹」の下に還り行かねばならぬ。其處には房々しき葡萄の蔓が今も尙ほ紫紅の色をみせて滴る斗りの甘汁を匂はして居る。群蜂はそが甘し香を慕ふて終日遊び戯れて居る。我等が心身を喜ばし靈的飢渇を止むるものは矢張り神の耕し給へる此の葡萄樹の美果でなければならぬ。

同じ約翰傳十五章第十節には「汝等若し我が誡を守らば愛に居らむ。我れわが父の誡を守つて其の愛に居が如し」とある。神の愛を得ることは詮する所キリストの愛を得ることである。キリストの愛を得ることは喜で其の誡を守るにある。されば律は之信仰の根本、祈禱は其の生命、愛は其の唯一源泉でなくてはならぬ。

あゝ「爾の信仰爾を愈せり！」之れ十二年血漏を患いた少女がイエスの衣に捫つた時にキリストの唇より洩れ出た貴き福音の一句であつた。かくて少女は眞實憐れな苦痛の境涯より救はれて健康の狀態に愈されたのである。苟も心より求めて神の力を得たいと願ふものは如何なる人如何なる境遇の人たるを問はず、神は喜で我等を救の道にと入れ給ふのである。あゝ知慧なく力弱き、我等人の子、希くは「アバ父よ」と神の御前に慕ひ寄つて一切の靈を父なる御神に委ねまつるべきではないか。我等の救は此にある。我等の活力は此に湧いて來る願くは傲慢小我の爲に、衷心奥秘の明鏡を曇らして一切罪過の中に滅落の淵近く一歩々と退歩しつゝある我等同胞は、須く先づ神の耕し給ふ葡萄園に馳せ寄つて、甘き香はしき葡萄の蔓に、眞に生ける力と貴き慈愛の恩寵とを獲得すべきではないか。

（十月十日早稲田友愛學舍に祈禱會於て）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

荒野に於けるキリストの誘惑

ペルシア人は云ふ迄もなく多神教の國民である。彼等の眼には種々錯雜なる神の姿が映つてくる。彼等は考へた。此の世は無數の善神と惡神とのスッラッグルである。一大戰場である。て若しも善なる諸神が勝を得れば、此の世は眞に淸められた靜かな幸福な世界て、我等人類も暫しは平和の生涯を樂しむことが出來る。が然し、若しも惡なる諸神が勢力を得るやうになると、我等は其の瞬間に於て苦痛と炎厄、不幸と不運の渦中に投入せらるゝのである。

斯かる信仰――或は寧ろ笑ふ可き一種の迷信――は深く古代ペルシア人の胸裡に刻み付けられて居た。否、一種眞面目な壯嚴な信仰であつたのだ。我等は元より此の如き信念に對しては全然一致贊同することは出來ぬ。が暫らく退て我等一個人の上に就て考へて見ると、此の一種可笑事として退くる古代ペルシア人の迷信なるものが、我等には――少くとも僕には――何だか斯う犇々と胸を打たれるやうな感じがする。

我等は事實として日々の行爲、日々の生活に於て、幾多容易ならざる苦痛と困難と誘惑とに出合して居る。善なる分子と不正不良の分子とは常に相亂れ相爭うて、千波萬波の活劇を演して居る。元より我等には一點牢乎として拔くべからざる生鮮の靈能が具つて居る。けれども幾多四周の誘惑は此の淸澄氷の如き明鏡を曇らせ穢さむと試むるのである。我等時として此等誘惑の甘し香に醉うては、惡鬼の脚下に跪くことがないとも限らぬ。かくて我等可憐の人子は常に古代ペルシア民族の――寧ろ笑ふ可き――信念と等しく、蒐然たる惡鬼と善神との修羅爭鬪の戰場に立つて居るかのやうに思はれる。此の刹那僕は路加傳第四章、「荒野に於けるキリストの誘惑」なる一節を讀むで、深い貴い聖靈の力を感知したやうに思ふ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

云ふまでもなく四福音書はキリストの御心を知る上に就て、乃至は基督教なるものを熟知する上に於て、最も重要なるものであるが、余は就中最も美しく詩的なる記述としてルカの一篇を推擧したいと思ふのである。斯う云ふと直樣「汝は聖書の精神を讀まずして、徒に字句に拘泥し、キリストの眞髓を沒却せるもの……」とのお叱を受けるのかも知らぬ。けれども其れは恐らく御無用の懸念であらう。思ふに文學として詩句として研究するには、四福音書、否新約の全書は餘りに錯寞で、あまりに堅苦しい。斯の如く始めより文學的聖書の研究か我が唯一の目的希望であつたのなら、僕の不明を以てしても倘ほ篤に舊約時代の聖句に走つて、ダビデの琴の音に耳を澄まし、ソロモンの下に跪いて其が妙なる忠言を聞き、詩篇や雅歌や箴言などに凝り固つて靜かに美妙の詩句を味つた筈である。けれども僕は別に聖書を文學的に研究しやうなどとは毫頭思はない。只名立たる丶四福音書の中て路加傳の記者のみが比較的美しい詩的な筆鋒を以て、キリストイエスの生涯に對したことだけを觀知したのである。同じ百合の花の例を寫すにしても、馬太傳其の他の記事とは大に其の趣を異にし、一讀して吾等の受け得べき印象の度が强烈であるやうに思ふ。と云つて約翰傳のやうに「我れ父に居らば父亦我に居る」の自覺がないかと云へば決してさうてはない。十七章第二十節の記事の如きは慥に此の信念を他の一面より書き示して居るものと思ふ。殊に今朝暫らくの間考へてみたいと思ふキリスト誘惑の一節の如き、四福音書、乃至は新約の全篇を通して見ても、暫らく他に類例なき强固な力ある教であるやうに思ふ。

偖イエス聖靈に滿されて、ヨルダンより歸り靈に導かれ野に適て、四十日惡魔に試らる。此の間何をも食はず、四十日畢りて後餓たり。 惡彼に曰ひけるは、爾もし神の子ならば此の石に命じてパンと爲せよ。イエス答へけるは、人はパンのみにて生る者に非す、唯神の凡の言に由と錄されたり、惡魔また、彼を高山に携ゆき一瞬間に天下の萬國を示して曰ひけるは、此のすべての權威と榮華を爾に予へん。我これを委任されたれば我が欲む者に之を予ふべし、故にもし汝我が前に拜

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

跪さば悉く爾の属とならむ。イエス答けるは、サタンよ我が後に退け。獨り主たる汝の神に拜跪し、これにのみ事ふべしと錄されたり…………………（路加四章一―八）

此處に引用した本文にも見へて居るやうに、イエスは聖靈に感されて流れ涼しきヨルダンの流れを下り、靈の力に導かれて荒野に至り、四十日の間猛烈なる惡鬼の誘惑を受け給ふた。かくてイエスは食を斷つこと殆ど四十餘日、心情の歡喜熱誠の力は能く彼をして耳目鼻口の慾求を忘れしめたのである。とは云へ、等しく生活の機能あるキリストの御身である。兎角の中飢喝の苦しみは次第に增進し來て、幾多凶暴なる苦痛は彼の一身上に肉逼し來つた。刹那に福音書中有名なる惡魔の誘ひ――荒野に於ける第一回の誘惑――は開始せられた「爾もし眞に神の子ならば此の石に命じてパンとなせよ」とは此の時惡魔がキリストに命じた第一の言葉てあつた。種々なる奇跡――例へば宴席の場所で水を甘酒に換へ、湖上を活歩し、足なへを癒し血漏の婦人を救ふた――キリストに取つては、必ずしも不可能のことゝは思へない。けれどもキリストは其の要求を退けて宣ふた「人はパンのみを以て生くるものに非ず。唯神の凡ての言によると錄されたり………」。惡魔は嘗て知らざる福音に接して狼狽なす所を知らず、早忽として遁げ走つたのである。あゝ人は決してパンのみを以て生くるものではない何と云ふ好妙の文字であらう。

世の人が日夜營々としてパンを得むと勉めて居るの事實は事實中の一大事實である。否此の問題の爲には幾多數多き同胞兄弟姉妹が――時には良心の命令を無にし、父なる神の意志に背いてまでも――全力を盡し全心を傾けて努力しつゝある。けれども我等は決して此の「パンのみを以て」生き得るものではない。少くとも我等人類に取つては、倘ヨリ大なる、ヨリ高價なる何物かゞ必要である。肉體の胃囊は常に溢るゝ程充實して居ても、世には靈の胃腸の空虛なるが爲に、憐れや餓死の生涯に瀕して居るものが幾ら居るかも知れぬ。我等は深

く此の一點に向て思を潜めて熟慮しなければならぬ。

パンの誘惑に於て脆くも破れた悪魔の群は、なか〳〵之位で默しては居ない。やがて彼等は再び陣形を正し勇氣を新にし、威風堂々として猛進して來た。今やキリストは神を裝ふ奸悪なるデブルに誘はれて、とある高山の頂に立ち給ふた。見渡せば天下の國々、名譽と聲望と富と權力と、一切世俗の美味玲汁は彼の脚下に展開して、燦然たる美觀を以て羅列して居る。人は此の威風に眩して慾求美望の念は我れ知らず胸裡に響き渡るに相違ない。果然悪魔の甘言はキリストの耳元近く美妙の樂音を吹き送つた。曰く「一切の權威と榮華、此等はみな我が手中に委せられたれば、爾にして一度我が前に拜跪さば此等悉く汝の屬とならむ……」誘惑は多くの場合に於て此の如き美觀を以て表はされ、蜜の如く甘いスキートは甘味を以て、我等肉體の心腸を試みる。あゝ此の膝一度屈せば世俗の榮華は掌中にあり、意の儘である。けれどもかゝる場合に於てこそ悪魔の恐ろしい毒刃は横つて居るのである。あゝ「サタンよ我が後に退け！」キリストの答は極めて簡單であつた。然も極めて壯嚴である。嚴格である。敢て一歩の假借もない。「サタンよ我が後に退け」何と力ある斷乎たる叫びではないか。流石の魔軍も遂に崩れた。地上の榮華は刹那に土塊視せられてしまつた。誘惑と試との聲は終に荒野の一角に消へ去た。

我等は日々數限りなき誘惑と幾多強暴なる試みとの世界に動いて居る時には苦い苦痛、甘い蜜のやうな誘ひ美しい花のやうな姿が幾度か我等内心の情操を亂さんとする。けれども高山の頂き、天下萬國を足下に瞰下してあらゆる榮譽とあらゆる權威とを以て誘ひ試みられたキリストイエスは、彼の天使の如き悪魔に向て最も強硬なる態度を以て恣凶の刃を揮き給ふたのである。「サタンよ我が後に退け」何と力ある叫てはないか。我等世にある間常に此の決心が必要である。此の確固不抜の信念が大事である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

多くの場合、悪魔の群は必ずや薔薇の如き美觀、蜜の如き玲汁を以て、我等人子を誘はむとし惑はさんと試むるのである。我等の胸裡にして若し一點の空虚だにあらば、我等の心身は立ろに悪鬼の手中に收められて、勝ち傲つたサタンの凱歌は天を動かし地を震はす境遇に立ち至るであらう。あゝ「サタンよ我が後に退け!!」—三誦十誦千百誦、尚ほ足りない感じを我等の胸深く與ふるものは實にや此の妙に魔はしきキリストイエスの一句である—、

要するにキリストの善悪是非に對する態度は極めて明瞭である。然と否之がエスの、我等に敎へ給ふ至要なる敎訓である。我等もし日常生活に於て、此の如き幾多數知らぬ誘惑と試みの中に立つた時に、荒野に於けるキリストの誘惑——「サタンよ我が後に退け」—此の一語を想ひ起すことは、非常なる歡喜であり又千百萬の軍隊に優つて優大なる力と鼓舞奬推者を得たやうに思はれるに違いない

(十月廿九日早稲田友愛學舍祈禱會席上に於て……櫻喬生)

めざまし日記の一節

(四十年一月廿一日…………櫻喬生)

今日は朝から雨が降つて風が恐ろしう唸つて居る。風雨だつて別に變つたことはない。唯身體がいやに冷えて外套の袖を濡らすといふ位なものだ。外には戸板を打ちつける雨の音が切りと聞へて居る。

學校の授業は十時なのだ。七時に床を出て、かうやつて火鉢を抱いて居れば、妙に氣持が好い。雨が降り風が荒れゝば荒れる程愈以て胸の中が透明になつてくる。人間の心も妙なものだ。此の寒さを人の軒端に憐れみを乞ふ貧兒があるとは知りながら、自分さへ暖かで氣樂であればそれで結構だ……と、まさか左樣ゆう悪魔

のやうな冷たい思想は毫頭ないにしても、人の心と云ふものは――何だか抑へ切れない程詩趣が湧いて來るものである。之は或は僕一人の獨斷的見解かも知れぬ。が然し、人は自己境遇の滿足を自己よりはずつと劣つている境遇の人と比較することに依て、更に一倍と新らしい快味を惹起する場合は事實として幾らもあるやうに思ふ。自分の今の境遇が丁度それなのだ。斯くて此の雨の日、風の日に、僕は何だか人に包み切れぬ程の興味を以てロングフエローの詩集を讀むで居たが、次の一節に至て思はず快哉を叫だ。襖一ツを隔てゝすぐ隣りの室に居たS君の笑聲が此の時雨滴の音に交つて仄かに聞へて來た。折柄風が一切りプッと窓の戸板を叩く。僕は愈佳境に辿り入つて、思はずマイルス、スタンディシュが美しい感情に支配せられて了つた。武骨一片のスタンディシュの口よりして、何麽しててんなに優しい詞が出たのかと思ふと、一層なつかしくなつて、云ひしらぬ嗜炙の情が湧き起るのであつた。

今其の一節を譯して見ると斯うである。

「人間は決して獨り居るのが幸福ではない……と聖書にも見へて居る。おれは嘗て左樣云つた。否、屢く繰り返した言葉なのだ。我が愛しい妻であつたローズスタンディシュ、彼女が失くなつてからと云ふものは、如何程いやな淋しい不快な月日を送つたのであらう。親しい友情の泉もなか〳〵之を癒すには足りなかつた。おゝ何の位自分は心の中で只ひとり悶へ苦むだのだらう。否、幾度か閑居の我が思は、あの花のやうなプリッシラが身の上に及だのだらう。可愛さうに、あの兒は天にも地にも唯一人の娘て、父も母も兄弟も、此の冬の初に失くなつてしまつたのだ。おゝ我は彼の女が先だゝれた父母兄弟の卒塔婆のほとりを幾度となく行きつ戻りつ、悲しさうに俛首て、重い苦い歩みを續けて居るのを見たのだ。もしや現世に果して天使なるものが居るとしたらば、自分は廣い世界に二人のエンヂエルが居ると思ふて居る。そして地上のエンヂエルと云ふのは誰あらう、プリッシラ其の人なのだ！　（マイルス、スタンディシュの一節）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

YOUNG WOMEN

OF

JAPAN

Vol. V. *November, 1908.* *No. 10.*

Miss M.A. Whitman, Chairman

Dr. Kei Okami, Vice-Chairman

Miss A.G. Lewis, Recording Secretary

Mrs. G.M. Fisher, Treasurer

Miss Michi Kawai, Active Member of the World's Committee

Miss Sumi Miyagawa, Corresponding Member of the World's Student Christian Federation

Resident Members	Non-Resident Members
Miss A. B. West	Miss K. Tristram, Osaka
Dr. Tomo Inouye	Miss N. B. Gaines, Hiroshima
Miss Hama Hirano	
Mrs. Hana Ibuka	
Mrs. Koharu Nakajima	
Miss Uta Suzuki	

Miss A. Caroline Macdonald,

General Secretary

Headquarters :— 15 Dote Sanbancho, Kojimachi,

Tokyo

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治三十七年五月七日第三種郵便物認可

YOUNG WOMEN OF JAPAN

Vol V. ***November 1908.*** ***No. 10.***

CONTENTS

A Little Dreamer....................Nao Otsuka.
Mary Lyon's Principles of Education......S. Niwa.
Physical Culture and Social Heredity. ....H. Omori.
Matthew Arnold's Poems ....U. Akita.
Women of the present Day...........Count Okuma.
Water Princess.....(Concluded). ....Yasu Tsujimura.
A Little Tower........................J. Tsubota.
"Thy Faith Hath Made Thee Whole."......Okyosei.
Christ Tempted in the Wilderness...........Okyosei.
The Formal Opening of the Association Hostel at Nandocho.

東京神田美土代町三秀舍印行

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA